

温故知新⑦

■ボードレス ランドスケープ

日本の造園は実質的に大阪万博から始まり、ランドスケープという言葉は近年ようやく定着したが、実体はまだまだとしか言いようが無く、公共事業に関してはむしろ後退の感が強い。

「温故」とは、見飽きない古き街並み、山中の踏分道の風景から「時間の集積」が織り成した情報を読み取り、そこにおける人々の離合集散の様や、心理の観察と私は考える。

現場体験と共に想像力も重要であり、その源となるのは幾多の書籍と自由な夢想の心。諸先輩の教えは、生身の人間の言であるから、盲信せず、良きことだけを頂くことである。ここで今の世の二つ項について問題提起をしたい。

まず、遊びの世界である。「安全」が前提となっており、注意も払わなくとも怪我をしない遊び場環境を求められる昨今である。そこには面白味も魅力も無く、子供の成長に必要な挑戦も挫折も無く、「危険対応能力の獲得」という役割を失っているのではないだろうか。

今一つは、都市の街路並木の現状である。うるさい方々からの苦情・予算削減への対応は為されても、けなげに排気ガスに耐えながら緑陰を与えてくれる並木は根も枝も伸ばせない。自然の命への配慮を欠く電線未満の処遇はやるせない。

「知新」とは、法律・マニュアルの柵の中で工夫を凝らすことではない。私たちの原点は境界にとらわれない無法の世界にある。無法とは法律を犯すことではなく、一人ひとりの人生に、法律が必要の無い安らぎと快楽を提供し、青い地球に人類が出来るだけ長く生存できる一助を担う志である。

そのためには、時代を担う子供たちに、無数の情報を内包する「自然の総体」を提供し、その美しさ・恐ろしさ・多様性とバランスなどを体験する機会を与えることである。ミニチュアの環境共生装置で満足しては、人類も地球も救えない。

「美しい国づくり」は美しい道と川から始まり、美しい青空と碧い海を獲得することに至ります。まずは、うっとりしい電柱・電線をやめること、「風景」とは群舞であり、その中で自らがどう動けば全体が輝くかを考えていきましょう。

中見 哲

(株)地球号代表取締役

【経歴】1947年生まれ。1969年関西大学文学部哲学科中退。環境事業計画研究所を経て1978年地球号創設。翌年より現職

【主な仕事】フラワーロード・東遊園地・布引ハーブ園等の設計。民間大規模住宅地・中国プロジェクトに従事。タリム石油再開発及び新本社建設事業(130ha)。武漢市・揚子江河川公園(30ha)。大連市長春路商業街再開発計画(6km/50ha)。

